

2019 年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	田中 夕子
研究テーマ	平安時代後期における貴族の作善について
研究概要	平安時代後期の日記『御堂関白記』『小右記』等に収録された作善に関わることばとそこで行われた作善の内容を考察して、当時の貴族が考えていた作善の意味を明らかにすると共に、平安時代仏教史における作善の意義を問い直す。

1. 研究活動の概要と研究成果	<p>本年度、平安時代の貴族の作善（修善）を明らかにするため、藤原道長『御堂関白記』と藤原実資『小右記』の「修善」の考察を行った。現在、『御堂関白記』（全体）と『小右記』の全体の半分に当たる貞元2年（977）～寛仁元年（1017）まで分析を進めた。この時期は藤原道長が権力の絶頂期を迎えた頃である。</p> <p>10世紀末～11世紀初頭の『御堂関白記』『小右記』に記された「修善」の主な目的は、主に病氣平癒や安産、出世、攘災（土木工事、行事の無事等）などであった。修善の内容は、明記しないものがある一方、内容を明記したものもあった。「修善」として行われたもの（行業）は、修法（加持）が中心であった。また、それに伴って造像・写経・僧侶への布施等も行われていた。</p> <p>考察した時期は中世浄土教の発展期に当たり、先行研究では、浄土往生を目的とした修善（作善）に注目が集まっている。しかし、二種の日記において、「修善」ということばは、現世利益を祈る目的の行いを指すものであった。これは、日記において得た考察であるので、他資料と総合的に考察していく必要がある。しかしながら、二種の日記を記した10世紀末～11世紀初頭の最高権力者の周辺（道長は左大臣・摂政、実資は大納言）では、主に現世の欲求を成就することを目的に行われた行業も「修善」ということばでも表現していたことは明らかであり、平安時代の「修善」ということばを、今後も複数の資料から総合的に考えて、平安時代の信仰を考察する必要があると考える。</p>
2. 学術論文・学会発表等	<p>論文「往生人・源俊房の信仰と行業」を『日本宗教文化史研究』第23巻第1号日本宗教文化史学会（2020年5月20日刊行）</p>
3. 今後の課題	<p>2019年度の考察は、『御堂関白記』『小右記』（前半）二記録のみの結果である。記述者によってもことばの使い方に独自性、変化があると考えられるため、他の資料も考察の対象にしてみたい。そこで今後は、藤原道長が出家～死去以後の『小右記』と藤原道長・実資と関係の深い藤原行成『権記』（収録年：991－1011）を取り上げて、考察対象を増やしていく。</p>